



第 39 号
発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院
人文科学研究科・旧文理学
部文学科 同窓会

(事務所)
〒753-0831 山口市平井773-2
沖田ビル202
電話・FAX 083-928-4527
郵便振替口座 01500-4-15902
http://kouibun.la.coocan.jp/
メール:kobun1981@ybb.ne.jp

新福利厚生棟 FAVO (ファボ)

令和元年10月1日(火)に吉田キャンパス総合図書館前にオープンしました。

愛称FAVO (ファボ)にはキャンパスの新しいコミュニティの場として多くの人が集い、みんなのお気に入りの場所 (FAVORITE) になってほしいという想いが込められています。

内田光邦会長を偲ぶ

前鴻文会 会長
岡光 一浩

さる一月八日、鴻文会会長の内田光邦氏がご逝去されました。享年七十四歳。ご病氣療養中とは存じつつも、訃報に接した時、驚きとともに正直すぐには信じられませんでした。と言いますのも、体調を崩されて突然欠席された一昨年夏の総会の後にお会いした折にはお元気な様子でしたし、その後も会長職を滞りなく忠実に務められ、電話でお話しした際にもいつもの若々しいお元気なお声を拝聴していたからです。

昨年末に会報の編集・発送作業を終えて、編集者たちと来る年の健康と再会を期して別れる際もお元気な様子だったと聞きます。しかしその後、急に体調を崩されたらしく、およそ二週間後には帰らぬ人となられたことをご葬儀の際に伺いました。誰もが信じられない突然のお別れでした。葬儀の席で私は、「ありがとうございました。本当にお疲れさまでした。」と感謝の言葉をつぶやきながら、氏を天国へとお送りしました。

私が内田氏と初めてお話ししたのは、会長職にあった私が氏に電話で鴻文会の役員をお願いした折りでした。ですから、私の氏との付き合い合いは鴻文会に関わるおよそ五年あまりであり、氏と長くご昵懇であった方々に比べれば、それは決して深いものであったとは言えません。しかし、それでも氏との懐かしい思い出がいくつか残っています。

会長職を一期務めた私が次期会長・副会長を探しているなか、私の仕事の無知・無謀さぶりから昇任や新任の目鼻がつかず途方に暮れていた時、かつての同級生を介してすがったのが内田氏でした。氏とはまったく面識のなかった私の、しつこい窮状の訴えに半ば呆れはて、しびれを切らすように氏が電話口で、定年後の人生

は社会のなにかのお役にたつべきでしょうから、副会長ならお引き受けしましょう、でも、あまり期待されても困ります、と誠実に遠慮がちに話されたお声は今でも、はつきりと私の耳に残っています。そうした氏の謙虚で誠実なお人柄は実際、その後の副会長や会長としての、控え目でありながらも、責任感をもったしつかりとした仕事ぶりに確実に発揮されることになりました。副会長就任時の氏は六十歳代後半、下関西高校長などの県下の教育界の要職を歴任された後、萩高校や山口高校、西京高校などで英語の非常勤講師として教壇に立たれるとともに、お住まいの大内地区のさまざまな委員やご自宅の稲作などにも精励されている、日々とてもお忙しい方でした。

氏とは文理学部文学科の学生として同じ時期、同じ後河原キャンパスで過ごしていたはずですが、まったく面識がありませんでした。一学年違いで、英文と独文の研究室が別棟だったことにも抛りますが、女性ばかりで男子学生がとりわけ少なく、しかも優秀な学生の多く集まる英文研究室は私にとってまったく縁のないところだったのです。でも当時、一歳下の英文には勤勉で優秀な男子学生がいるという噂は耳にしたことがありました。成績優秀で卒業時には文学科の代表を務められた氏は、その後、英語の教師として県下の高校にお勤めされたようですが、卒業後のことは当然のようにまったく存せず、鴻文会の役員になられた際に、高校長として定年を迎えられたことを初めてお聞きしました。

そんな、お互いのことをまったく知らない間柄ゆえ、会長と副会長としての仕事の踏み出しには当初少なからず不安もありましたが、それはすぐにも見事に杞憂に終わりました。四年間、私たちは役員として、そして会長・副会長として、いかにも旧知の間柄のごとく、なんの不自由さもなく楽しく鴻文会の活動に携わることができたように思います。

鴻文会の役員の仕事にはいろいろなことがあります。氏は副会長として、年度ごとの事業・予算等の議案づくりや、役員会での議案や決算・予算等の協議、山口大学創基二〇〇周年等

の検討のためにしばしば開催された山口大学同窓会理事会、山口大学ホームカミングデー、なども開かれた「鴻文」編集のための会議などの公的な協議や催しはもちろん、無能にもかかわらずなんでも背負いこんでしまう私の問題提起や検討などにも、しばしば有能さを発揮され、鴻文会の運営・発展に大いに尽力されました。

また、私が病気のために、あるいは山口から遠く離れたところに住んでいるために協議会に出席できない場合などには、氏はいつも快く会長代理を引き受けてくださいましたし、比較的多かった飲み会の席にも、ご病気のために酒を控えられておられるにもかかわらず、いつもこやかに付き合ってくださいました。私が会長職を楽しく、どうにか無事に務めることができましたのも、ひとえに氏の「ご尽力に拠るもの」であり、ここにあらためて、いろいろな「ご苦労」に対するお礼と感謝を申し上げる所です。

氏は副会長時代の後半、なんどもお身体の変調を訴えられ、入院を繰り返されましたが、仕事のできる、信頼のおける誠実なお人柄ゆえに、役員全員一致で次期鴻文会会長に推挙されました。会長就任に際して氏は、会報において鴻文会の進むべき指針について提言されるとともに、ご自身の役員としての信念について、南米アンデスの寓話に託して次のように語っておられます。

「山全体が火事の炎に包まれているときに、小さなハチドリはその嘴で水を運び、消火に努めようとしています。他の動物たちはこの姿を見て「無駄なことだ」と言います。私たち役員の仕事もこのハチドリのいとなみの如きものかも知れませんが、自分にできる努力を続けていきたいと考えています。」(「鴻文」第三七号)。

私は氏との短い付き合いのなかで、「ハチドリ」のひとしづくの精神で謙虚に誠実に人生を貫かれた氏に、人としての人生の生き方の手本を窺ったような気がしてなりません。

氏は、そうした卓抜な、確固たる信念に満たした人生観をもってさまざまな分野でご活躍されているさなかの七十歳代半ば、運命とはいえず半ばで人生を終えられました。ご本人にとって

はこれ以上ない痛恨の極みであり、その悲しみはとてつもなく大きかっただろうと思われれます。鴻文会としても、会長として会を引っ張っていただかなくてはならない方を失い、その前途はおぼつかないものとなりましたが、氏の、「謙虚に誠実に(ハチドリ)のひとしづく」のごとく」という生き方は、私たち一人一人がどう生きるかを、そして、役員として鴻文会とどうかわり、その発展に尽くすべきかを教えて下さったように思います。ここに、内田光邦氏の数々のご遺徳を偲び、厚くお礼申し上げますとともに、重ねて衷心よりご冥福をお祈りいたします。



内田光邦会長

(文理第一四回卒・ドイツ文学)

大学関連ニュース

(鴻文会が関わったもの)

山口大学同窓会理事会等の報告

・第二七回山口大学同窓会理事会

平成三一年三月八日(金) 一五時～

事務局二号館二階特別小会議室 一五時五五分

理事・森重副会長出席

監事・山田監事出席

「各同窓会からの分担金に関する内規」の一部改正について

平成三〇年度事業報告及び決算報告(暫定)

について

平成三一年事業について

平成三一年事業について

山口大学の動向について
山口大学基金について
その他

・山口大学卒業式

平成三一年三月二〇日(水)

山口県スポーツ文化センター

森重副会長出席

・第二回旧制山口高等学校一〇〇周年記念事業委員会

令和元年六月三日(月) 一二時～

一四時四〇分

理学部四階小会議室

委員・渡邊副会長出席

記念式典・祝賀会について

記念誌の発行について

広報について

経費について

今後の予定について

・第二八回山口大学同窓会理事会

令和元年七月二六日(月) 一五時

一六時

事務局二号館二階特別小会議室

理事・森重副会長出席

国際総合科学部同窓会「福果会」の設立に伴う理事の選出、分担金の扱いについて

平成三〇年度事業報告及び決算報告について

平成三〇年度会計監査報告について

令和元年度事業計画及び予算について

山口大学の動向について

山口大学基金募金状況及び

支援事業について

その他

・第三回旧制山口高等学校一〇〇周年記念事業委員会

令和元年一月一七日(木) 一〇時～

一一時

理学部四階小会議室

委員・渡邊副会長出席

一〇月一七日現在の参加状況について

式典パンフレット、記念誌について

準備状況及び当日の進行について

・第七回山口大学ホームカミングデー

令和元年一月二六日(土) 一四時～一六時



紅葉の龍福寺参道

歴史学コース 橋本義則先生が、療養がなわず、平成三一年二月一六日 逝去されました。

橋本先生は、日本史学界の第一線において多大な功績を残されました。また、人文学部においても、学部運営を強力に補佐し、研究部長を長年務められるなど、多くの貢献を果たされました。

ここに在りし日の橋本先生を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

旧制山口高等学校創立一〇〇周年・ 山口大学文学部創立七〇周年記念式典挙行

―歴史をつなぎ 想いを伝える―



山口大学文学部が発足して七〇年となりました。昨年度、松野浩嗣前理学部長を委員長とする旧制山口高等学校創立一〇〇周年・山口大学文学部創立七〇周年記念事業委員会が発足し、記念式典を開催する準備を進めていたものです。

松野浩嗣記念事業委員会委員長の式辞、岡学長挨拶の後、所用のため出席がかなわなかった旧制山口高等学校第三〇回修了生山田洋次映画監督からの挨拶文を同期の森脇逸男氏代読により披露されました。その後、旧制山口高等学校の友誼校である旧制松山高等学校同窓会事務局長秦敦様からの祝辞、東京鴻南会代表桑原茂様からの祝辞がそれぞれ森脇逸男氏、坂田友三氏の代読により披露されました。

野崎浩二理学部長挨拶の後に高木智見人文学部長の挨拶が述べられ、旧制山口高等学校から山口大学文学部を経て、現在の山口大学人文学部・理学部へと長くつながる歴史とともに、社会を支える優秀な人材を輩出する一方で、時勢に流されず真理を追究する場としての高等教育機関の使命を再確認し、閉式しました。



令和元年一〇月二六日、山口大学学生会館において、旧制山口高等学校創立一〇〇周年・山口大学文学部創立七〇周年記念式典が執り行われました。
一九一九年四月、山口大学人文学部及び理学部の前身である旧制山口高等学校が設立されて一〇〇年となりました。また、第二次世界大戦後の学制改革により一九四九年度(昭和二十四年度)末に旧制山口高等学校は廃止、同年度六月

式典終了後、新福利厚生棟F A V Oに会場を移し、祝賀会を開催しました。

森重祐二鴻文会会長代行による挨拶、乾杯により開宴し、学舎を築立ち長い年月を経ているにもかかわらず、出席者一同、学生時代にタイムスリップしたかのように、なごやかに懇談がすすみました。



森重会長代行 挨拶



鴻峰はれて紅匂ひ
白鳩高く空飛べど
混濁々の黒潮の
逆巻きかへる響きして
邪と迷とに人々は
静かなき夕かな
應援歌(鴻峰はれて)

旧制山口高等学校卒業生の方々が、朗々と、力強く寮歌や応援歌を歌いあげられた時は拍手喝采、卒寿を迎えられた大先輩の方々に、人生

を謳歌し、また、日本社会の急激な成長を支えてこられた気概をお示しいただき、私達後輩へエールを送っていただきました。
テーブルスピーチをお願いされた方は皆様、思いあふれて前方に進み出られ、在学中、卒業後のエピソードを紹介されました。
旧制山口高等学校、続く文学部創立期の卒業生のお話に出てきたストームの炎を連想させる、晩に染まった西空がF A V Oのガラス戸に映る頃、なごり惜しみながらのお開きとなりました。
(人文第三回卒・西洋史学 渡邊早苗)



◎平成 30 年度事業報告

1. 正副会長会議（5/15）
2. 第 49 回（5/19）・第 50 回（3/9）役員会
3. 第 26 回（7/30）・第 27 回（3/8）山口大学同窓会理事会
4. 会報「鴻文」編集会議（11/16）
5. 第 6 回山口大学ホームカミングデー（10/27）
6. 会報「鴻文」第 38 号発行（12/15）
7. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式（3/20）
8. その他

◎令和元年度事業計画（案）

1. 第 51 回役員会（5/11）
2. 山口大学同窓会理事会（7/26）
3. 第 7 回山口大学ホームカミングデーおよび旧制山口高等学校創立 100 周年・山口大学文理学部創立 70 周年記念式典（10/26）
4. 会報「鴻文」編集会議（11/28）
5. 会報「鴻文」第 39 号発行（12 月予定）
6. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式（3/24）
7. その他

◎平成 30 年度決算

収入総	5,453,750 円
支出総額	2,114,869 円
残高（次年度繰越金）	3,338,881 円

◎令和元年度予算（案）

〈収入の部〉

科	目	30年度予算額	決 算 額
繰越金		3,097,106	3,097,106
会費収入		1,800,000	1,500,000
繰入金		650,000	650,000
賛助金		300,000	184,185
雑収入		22,894	22,459
合 計		5,870,000	5,453,750

〈収入の部〉

科	目	元年度予算額	摘 要
繰越金		3,338,881	
会費収入		1,800,000	10,000円×180人
繰入金		0	
賛助金		200,000	
雑収入		119	利子等
合 計		5,339,000	

〈支出の部〉

科	目	30年度予算額	決 算 額
会議費		50,000	35,144
役員等行動費		50,000	15,000
事務所運営費		940,000	876,460
事務費・通信費		200,000	149,672
会報費		750,000	735,717
ホームページ維持費		30,000	21,384
分担金		151,000	150,864
寄付金		100,000	0
助成金		100,000	64,728
慶弔費		50,000	65,900
予備費		3,449,000	0
合 計		5,870,000	2,114,869

〈支出の部〉

科	目	元年度予算額	摘 要
会議費		50,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費		30,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費		990,000	家賃、人件費、事務所経費（電話・電気、その他）
事務費・通信費		160,000	封筒印刷6,000枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費		750,000	印刷7,200部、発送6,000通、発送アルバイト代
ホームページ維持費		25,000	プロバイダー契約料、メールウイルスチェック料、その他
分担金		151,000	山口大学同窓会（手数料含む）
寄付金		0	山口大学教育研究後援財団を統合した山口大学基金からの寄附依頼はない
助成金		100,000	「同窓会等」開催助成（手数料を含む）
慶弔費		50,000	他同窓会への祝い金、祝電、その他、香典料、弔電
予備費		3,033,000	
合 計		5,339,000	

〈特別会計〉

科	目	29年度財産	28年度財産
中国電力債		1,465,537	1,465,537
定額預金		650,000	0
合 計		2,115,537	1,465,537

〈特別会計〉

科	目	元年度財産	摘 要
中国電力債		1,465,537	東洋証券
定額預金		0	
合 計		1,465,537	

平成31年4月22日、監査の結果過誤なく的確に
 経理されていることを確認します。

監 事 山田 典子
 片山 恵子

退任教員ご挨拶

お世話になりました



平野 芳信

私が山口大学人文学部に赴任したのは、一九九三年の一〇月だったと記憶します。そのわずか一年三ヶ月後に阪神淡路大震災が起こりました。一時期、その近隣に居住していたので、あの阪神高速道路の横倒しになった光景は、未だに目に焼き付いております。爾来、四半世紀が経ちました。あつという間という気もしますし、やつとここまできたどり着いたかという想いもあります。

赴任直後に、いわゆる大綱化(今思えば、あきらかに規制緩和でしたが)によって、教養部が解体されました。それに伴う対応を話し合う会議は、それはそれは時間が長くて、驚愕したことをよく覚えています。その後の大学(いや、日本)を圍繞する環境の激変は、もはや筆舌に尽くしがたいものがあります。一番記憶に残っているのは、国立大学から国立大学法人に移行したことでしょうか。まさにその変わり目に、当時学務委員と呼んでいた役職(?)を務めておりました。学務委員とは、現在の学生委員と入試委員長の仕事を兼ねたものでしたので、月一回開催の教官会議(今の拡大教授会)では、マイクの専有時間が議長の学部長と二分するほどでした。

山口大学人文学部で過ごしたおおよそ二五年間の思い出はあまりに多くていちいち書ききれませんが、この原稿依頼を受けて改めて指導した

学生のことに思いを巡らすことに致しました。概数でいえば、学部生が約二五〇名、大学院生が約二〇名ですので、教えてなんぼの教師としては、まずまずといったところででしょうか。しかし、決して体力に恵まれぬ私にしては、この数字はリタイア後も、いささか誇れるものだなと思う次第です。

一方の研究面では、単著が三冊ですので貧弱なものです。が、幸運にも一冊が韓国語に、別の一冊が中国語(繁体語)に翻訳されました。自分の著書が己では読めぬ言語に変換されるという経験は、なんともまあ不思議なものでした。とにかく、できあがった現物を手にしても、果たしてそれが本当に自身が記したものを基にしたものかどうか判断しかねるのです。中国語の場合は、なんとか判別可能な漢字の痕跡が有るのでまだしも、ハンゲルに至っては全くお手上げです。奥付に「Copyright (C) 平野芳信, 2011」とあるので、かろうじて、自著の韓国語版らしいと確認できるだけなのです。一番心配な誤植や誤訳の確認に関しては、完全に人頼みなのです。

しかし、少なくとも私がお世話になった翻訳者並びに出版社の方々が、どうすればよりよき本になるのかという目標に向かって邁進するその姿には、敬服するものがありました。そして、この経験はある大切なことを教えてくれました。かつて、いわゆる不幸な歴史を抱える近隣の外国で、そのような過去にとられることなく、日本文学に馴染み、あまつさえその魅力を自国の他の人々に伝えようとする人たちが存在しているのです。それは、日本人にとって何と

いうありがたいことではないでしょうか。最後に、ここ数年で一番うれしかったことを記しておきます。もうかなり前から、授業評価が実施されていますが、あれは三年ほど前の出来事になると思います。新海誠監督の映画『君の名は』が大ヒットした、あるいはヒットしつつあった頃のことです。ある日、大学宛に私へ手紙が届きました。差出人の名前がなく不審に思いながら、中身を読んでみると、何でも自分は十年ほど前の人文学部の卒業生であるとのこ

とでした。その人物が在学中、私がある授業で、新海監督の実質的なデビュー作『ほしのこえ』を上映し、そのすばらしさを称賛し、間違いなく村上春樹の影響を受けていると力説したらしいのです。その卒業生は当時どうしても納得できず、授業アンケートで自分の個人的な趣味を押しつけるなど批判したことを一言詫びたいということでした。

教師として、研究者として、このときほど、我が意を得たりとニヤリとしてしまったのはいうまでもありません。

老人の思い出話はこれくらいに致しましょう。皆々様、種々お世話になり、ありがとうございます。人文学部のより一層の躍進を祈念致しております。

(日本・中国言語文学コース 教授)

一〇月にオープンしたFAVOは、一階に一五〇席のカフェレストラン、売店、多目的ルーム(交流スペースや催しに利用)、二階にはブックストア、各種サポートカウンターを設置し、学生、職員の福利厚生の上昇に寄与しています。



2階 サービスゾーン



上 1階 カフェレストラン 焼きたてパンが人気
左 1階 ワンプレートランチ



1階 多目的室

鴻文会役員

平成二九年八月〜平成三三年八月
(令和三年)

名譽会長

高木 智見 (人文学部長)

会長

副会長

森重 祐二 (昭五五年卒・社会学)
渡邊 早苗 (昭五九年卒・西洋史学)

顧問

和田 敏英 (昭二八年卒・英米文学)
大塚 博久 (昭三一年卒・中国哲学)
大野 光生 (昭三一年卒・中国哲学)
田中 晋 (昭四一年卒・英米文学)
岡光 一浩 (昭四一年卒・ドイツ文学)
添田建治郎 (昭四四年卒・国文学)

委員

兼清 仁志 (昭五二年卒・中国哲学)
原口 公康 (昭六三年卒・日本思想史学)
山本 明史 (昭六三年卒・国史学)
山本 達夫 (昭六〇年卒・西洋史学)
齊藤 慎 (昭六一年卒・東洋史学)
林田 徳夫 (昭五七年卒・社会学・
社会心理学・社会人類学)
和崎 睦子 (平六年卒・社会心理学)
大谷 泰子 (平一三年卒・社会情報論)
正分あゆみ (平一六年卒・博物文化論)
青島 啓 (平一〇年卒・博物文化論)
鈴木千登世 (昭五九年卒・国文学)
橋本 達彦 (平五年卒・国文学)
藤井 浩子 (平二五年卒・中国語学)

中国文学

池田 容子 (平九年卒・英米語文化論)

江浪 香織 (平二七年卒・
ヨーロッパ言語文学 (独)

浅野 靖 (昭五七年卒・フランス語学
フランス文学)

中村稚恵利 (平一三年卒・言語情報論)

監事

山田 典子 (昭六一年卒・社会学
社会心理学・社会人類学)

片山 恵子 (平元年卒・英米文学)

学内委員

根ヶ山 徹 (昭六〇年卒・中国語学
中国文学)

村田 裕一 (平三年卒・考古学)

鴻文会会則

(昭和五六年一月三十一日制定)

(総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市
平井七七三―二沖田ビル二〇二におく。

第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口
大学人文学部の発展に寄与することを目的と
する。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次
の事業を行う。

- 1. 会報及び会員名簿の発行
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

(会員)

第四条
1. 正会員 山口大学文理学部文学科卒業生、
人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大
学院人文学部研究科修了者
2. 準会員 山口大学人文学部学生及び大学
院人文学部研究科院生
3. 特別会員 山口大学文理学部文学科旧教
官、人文学部教官及び旧教官
(会費)

第五条 本会の経費は、会費、寄付金、その他
の収入をもって当てる。正会員は終身会費
一〇、〇〇〇円を納入する。準会員は入学時
において上記の終身会費を納入する。

第六条 本会は次の役員をおく。任期は四年と
し、再任は妨げない。

- 1. 会長 一名
2. 副会長 二名
3. 委員 若干名
4. 監事 二名

第七条 役員は次の職務を行う。
1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副
会長は会長を補佐する。
2. 会長、副会長及び委員は委員会を組織し、
会務を処理する。

3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。
第八条 委員会は名譽会長に人文学部長を、顧
問に人文学部長経験者 (本会正会員) ならび
に会長経験者を、また会務運営のために幹事
若干名を委嘱することができる。

(総会)

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を
審議して出席者の過半数をもって議決する。

- 1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項

第十条 会員は本会の事業を推進するため、必
要に応じ支部を設けることができる。

附則
この会則は昭和六〇年一月二日より改正施
行する。
この会則は平成九年八月二三日より改正施行
する。
この会則は平成二五年八月一七日より改正施
行する。

鴻文会 会員名簿利用規則

一、会員名簿の更新 (新規入会、異動に伴う)
と保管は事務局で行う。
二、会員名簿は会員に限り開示することを原則
とする。

三、会員名簿は、会員相互の親睦、会の発展を
目的とした利用に限り使用することができる。
営利を目的とした利用は禁止する。

四、会員名簿の開示は、直接に事務局で求める
か、郵便またはファックスで申し込み、事務
局は、申し込み者が会員であることを確認し
て会員名簿を送付する。これにかかる経費は
利用者が負担する。

五、会員名簿の開示申請者名簿 (利用者名簿)
を作成し、事務局で保管する。



12月 クリスマス市になる山口市
県立美術館横のイルミネーション

歴史学コース
 教授 馬 彪
 教授 田 晋
 教授 竹 幸
 教授 真 隆
 教授 滝 正
 教授 村 裕
 教授 池 田 勇
 教授 石 田 泰
 講師 南 雲 輔

人文学科
 哲学コース
 教授 高 木 智 見
 教授 脇 靖 弘
 教授 Alan Djumali
 教授 柏 木 寧 子
 教授 藤 川 哲
 教授 栗 原 剛
 教授 村 上 龍
 教授 横 田 蔵 人

学部長(併)
 教授 高 木 智 見

人文学部教育職員紹介
 (令和元年一〇月現在)

平野芳信先生
 最終講義のお知らせ

演題 デレク・ハートフィールド考
 日時 令和二年三月七日(土)
 一四時～
 場所 山口大学人文学部 大講義室

図書館司書養成課程
 講師 伊 東 達 也

欧米言語文学コース
 教授 岩 部 浩 三
 教授 太 田 聡
 教授 Hintereder Ende Franz
 教授 池 園 宏
 教授 武 本 雅 嗣
 教授 上 田 由 紀 子
 教授 Michel de Boissieu
 教授 下 寄 正 利
 教授 Phillips John David
 教授 乾 秀 行
 教授 外 山 健 二

日本・中国言語文学コース
 教授 平 野 芳 信
 教授 富 平 美 波
 教授 根 ヶ 山 徹
 教授 和 野 弘 学
 教授 森 野 昭 正
 教授 野 坂 雄 弘
 教授 尾 崎 千 佳
 教授 更 崎 慎 一
 教授 安 本 真 弓

社会学コース
 教授 横 田 尚 俊
 教授 高 橋 征 仁
 教授 速 水 聖 子
 教授 谷 部 真 吾
 教授 小 林 宏 至
 教授 山 口 陸
 教授 桑 畑 洋 一

資料提供 人文学部

(人) 大学院人文科学研究科

	人文科学専攻
1年	3
2年	7
合計	10

資料提供 人文学部

(人) 人文学部

	人文学科	人文社会学科	言語文化学科	合計
1年	198			198
2年	221			221
3年	188			188
4年	170	18	10	198
合計	777	18	10	805

学生数 (令和元年一〇月現在)

(人)

	学部卒業	大学院修了
建設業	2	
製造業	12	
情報通信業	17	
運輸業・郵便業	7	
卸売業・小売業	27	1
金融業・保険業	12	
不動産業・物品賃貸業	8	
学術研究・専門技術サービス業	6	

資料提供 人文学部

(人)

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	2	
教育・学生支援業	17	2
医療・福祉	5	
複合サービス事業	6	
サービス業	11	
公務	26	
上記以外の就職先	26	
進学	2	
合計	186	3

平成三〇年度 学部卒業生・大学院修了生の進路

令和元年度

山口大学人文学部
生涯学習事業

令和元年度に、人文学部生涯学習推進室が催した事業について報告します。現在、生涯学習推進室では、山口大学地域未来創生センターとの共同で、二つの公開講座を実施しています。一つは、山口大学吉田キャンパスで開講する「やまぐちサタデー・カレッジ」(以降、「サタデー・カレッジ」と略称します)です。人文学部が吉田キャンパスで実施する公開講座・開放授業は一九八九年(平成元)から行われていますので、今年で三十一回目の開催となりました(但し、「サタデー・カレッジ」という名称での実施は二〇〇一年からです)。もう一つは、防府市教育委員会のお世話で開く公開講座であり、今年で八年目となりました。

令和になって初めてのサタデー・カレッジは、六月一日、八日、一五日、二二日の日程で、社会学コースの速水聖子教授に担当していただきました。

速水先生の専門は社会学、とりわけ地域社会学、福祉社会学であり、地域社会に関わる人々の多様な役割を通して、すべての人にとって住みやすい地域社会づくりはいかんにして可能なのか、という観点から研究を進められています。

速水先生によるこの度の公開講座の演題は「子育て支援と地域のつながり」(社会学から学ぶ)でした。授業では、現代社会において子どもをもつことの意味や、子どもを育てるもしくは子どもが育つ上で問題、さらには家族のあり方などを様々な角度から分析することで、子育てを個々の家庭に任せきりにするのではなく、社会的に支援する必要があるのではないかとという視点(このような視点を、速水先生は「子育ての社会化」と呼んでいます)が提示されました。加えて、各地で多様な形態をとる学童保育を取り上げ、子育て支援政策制度と学童保育のあり方について考察をされました。速水先生は、

これらの内容を「少子化と社会学、子育てと社会学」(六月一日)、「子どもの価値」と子育て問題(八日)、「家庭の教育役割と子育て支援政策」(一五日)、「学童保育の地域化と協同」(各地の事例を通して) (二二日)と四つの項目に分け、各日九〇分で解説されました。

授業では、各種アンケートの結果や統計などにもとづく数値データ、さらには新聞記事等も示しながら、講義内容を具体的に理解できるように工夫が凝らされていました。



やまぐちサタデー・カレッジ2019の様子



講義中の速水聖子教授

他方、防府市での公開講座は九月一五日と二八日に、防府市文化福祉会館にて行われました。講師は、平安時代の文学を専門とする、日本・中国言語文化コースの森野正弘教授でした。森野先生には、「源氏物語」講義」というタイトルで講義していただきました。

授業では、五四帖からなる「源氏物語」のう

ち、光源氏の青春期の物語である「帚木」巻と「夕顔」巻に関する内容を九月一五日に、文化的円熟を見せる六条院時代の物語である「玉鬘十帖」についての内容を二八日に、それぞれ九〇分授業を二コマ使って解説されました。いずれの回も物語の主要な場面を抜粋し、その表現に注目しながら、背景にある貴族社会の政治文化、信仰について詳しく話されました。

例えば、一五日の講義では「初冠(ういかぶり)」についての説明がありました。初冠とは元服、つまり成人儀礼(成人式)を意味する古語です。そうした成人儀礼について、民俗学の報告事例や中国の古典、さらにはフランスで活躍した文化人類学者でもあり、民俗学者でもあるファン・ヘネップの説や、ルーマニア生まれの宗教学者エリアードの説などを踏まえ、その特徴を次の三点にまとめられました。すなわち、第一に成人儀礼を受ける者は母親から分離されること、第二に一時的に隔離されて生活すること(日本ではこうした隔離生活を「籠り」といいます)、第三にその隔離生活中に年長者による特別な教育が施されること、です。このような成人儀礼を経験することで、若者は大人になるための条件を後天的に獲得し、大人の世界に組み込まれる資格を得るのであって、成長すれば自然に大人になるわけではないと指摘されました。

また二八日の講義では、「玉鬘」巻に書かれている、年の瀬に源氏が紫の上とともに正月用の晴れ着を女性たちに配るといふ場面に注目し、民俗学者の折口信夫の説を紹介されました。折口は、そうした衣配りを、衣に魂をつけて分配するための行事であると解釈しています。このように森野先生は、他分野の研究成果も紹介しつつ、「源氏物語」の世界を深く掘り下げて解説されました。その意味で、きわめて刺激的な講義でした。

ところで、令和元年度の防府市での公開講座は、当初九月一五日と二二日に実施する予定でした。しかし、台風一七号の影響で、二二日の授業が二八日に変更となってしまいました。急な変更であったにもかかわらず、二八日の授業

に足を運んでくださった受講生の皆さんに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

生涯学習推進室では、来年度も春か秋にサタデー・カレッジを、秋ごろに防府市での公開講座を予定しています。現在のところ、サタデー・カレッジは美学が専門の村上龍准教授に、防府市での公開講座は江戸時代の思想について研究している栗原剛准教授に、担当していただくことになっています。日程や講義内容等につきましては、詳しいことが決まりましたら、山口大学地域未来創生センターのホームページや、同センターが発行する「受講生募集案内」を通じてお知らせします。気になる講義がありましたら、ぜひご参加ください。皆様のお越しをお待ちしています。

(人文学部生涯学習推進室長

准教授 谷部真吾)



講義中の森野正弘教授



防府市での公開講座の様子

(写真提供: 地域未来創生センター)



一の坂沿い「鴻南に寄する歌」が刻まれた記念碑

旧制山口高等学校設立一〇〇周年・山口大学文理学部創立七〇周年記念式のためにお寄せいただいたメッセージを寄稿して下さった方のご了解を得て、「鴻文」の同窓賛歌として再掲載させていただきます。また、式典後にお寄せいただきましたものも共に掲載いたしました。

同窓賛歌

再び「去年の雪いまいづこ」

和田 敏英

先年、山口大学退職記念特集号「学報(第四七九五)別冊」に同じ表題の拙稿を寄せたが、旧制山高から文理学部、人文学部へと学生あるいは教官として、多少なりとも母校発展の繋ぎ役を果たしてきたことを誇りに思っている。

なにして、終戦後数年のこと、新制大学発足の困難な時期に当たり、将来の展望は必ずしも明らかとは云えず、諸情勢不安など底時代を経験した。寮生活など米不足による砂糖配給、いわゆる砂糖休暇校の事態にも遭遇した。

唯一の楽しみは、経済学部講堂で催された講演会や映画上映会、鈴木大拙の禅の話講演会やルネ・クレール監督の「巴里祭」などその好例「柳桜をこきまぜて後河原の枝並みに」と放歌高吟の幾星霜、まことに懐旧の情沈澆、青春の絵巻が走馬灯のように次々と思い出される。

(文理第一回卒 英米文学)

山口大学記念行事に参加して

松浦 亮

私は戦後昭和二十四年の学制改革で発足した新制山口大学の六期生です。後河原の文理学部で学んで、近くの旧山口高商の鳳陽寮で起居する学生生活でした。

授業、生活ともにまだ旧制高校の名残が濃く残っており、英文科では山高時代からの教授が多く言語学や古代英語、中世英語など今から思うと極めてオーソドックスな授業でした。実学の傾向が強い今の時代には受けられない貴重なものだったような気がしています。担当の田中美輝夫教授から「文科の卒業生には世間で即役立つ資格のようなものはないけれど、山で培った人生への志を大切にしてほしい」と言われた言葉が胸に残っています。

寮生活も伝統を受け継ぐストームで大騒ぎをする一方では、宮野の女子大生を招きダンスパーティーや長門峡へのハイキングを催して新しがつてみる時代でした。

中国新聞に就職した広島では経済界や官庁に旧制山高出身者も多く、記者としての取材では「後輩山大出身」と声をかけられました。

山高同窓会広島鴻南会は昭和四九年に会員八〇人で発足し活発に活動していました。平成五年に広島寮歌祭で先輩方の手伝いをしたのが縁で旧制山高後継の山大文理学部出身者として会に加えてもらいました。会員の老齢化が進み、平成一三年からは元中国電力会長の多田公熙氏はじめ会員二十数人となった会の事務局を私と津田重喜君、一期下の仁田浩君の文理学部英文科出身三人で引き継いできました。東京、近畿と各鴻南会の解散が進む中、広島も平成二十七年に解散となりました。

私どもは文理学部在学時代同様に広島鴻南会でも旧制山高の伝統と気風を受け継ぐことが出来たと思います。同窓会の度に先輩たちが語る古き良き時代の旧制高校回顧談に聞き入りました。弊衣破帽で寮歌を高唱し、哲学を語り、国

を思う志を誓った日々。戦時下の学徒動員の体験。戦後学制改革に至る時期の混乱など先輩たちの体験は「会報広島鴻南会便り」に収録してきました。会の終わりに山高校歌と鴻南に寄る歌を共に歌い旧制山高が育んだ青春の熱い想いを感じてきました。

私ども広島での旧制山高・山大文理学部継承の試みはささやかなものでしたが、今回の山高一〇〇周年、山大文理学部七〇周年の記念行事には大きな意義を感じます。改組発展した人文学部、理学部の皆さんにも山大の歴史に旧制山高を継承するわずか二九年間の文理学部の時代を顧みてもらえるものと感謝しています。

(文理第六回卒 英米文学)

菊谷 進

桜満開の昭和二九年四月、待望の山口大学文理学部へ入学しました。教養課程講義は亀山の麓の経済学部校舎で行われました。講義内容は思ったほどむずかしくなく楽しく学びました。

さて、専門課程では東洋史学を専攻。内容が教養課程とは違い高度になり難しいと感じました。史学概論・普通講義等を受講。特に史料講読・演習などの授業では緊張もし難儀をしました。狭いテーブルを中にして向かい合わせの授業でした。予習が不十分で説明力が劣ると先生の眼がきらりと光り怒られたものでした。

又、当時研究室では雑誌「石敢当」を発行し、お互いの融和を図りました。授業が終わって先生からしばしば映画鑑賞・喫茶店巡りに誘われ一緒に歩きました。学生生活に精彩を欠く私を少しでも元気づけようと気を配ってくださったように思います。

さて、大学を卒業して六〇年が過ぎました。山口大学におかれましても時代をみつめ創意工夫のもと地域社会で増々発展下さるよう願っています。

(文理第六回卒 東洋史学)



1956年 山口市付近の山頂で

「旧制山高」の伝統を受け継いで

木下 正俊



私の学生生活は昭和三〇年代(一九五五年)の前半(後河原時代)です。学生は現役から予科練帰りの三〇才過ぎ迄と多彩でしたが、皆同輩の付き合いです。当時の服装は黒の詰め襟にLかSかのバッザ、靴は少なく運動靴か下駄が多く、それが交換したばかりの旧山中の木造校舎の床に響いていました。

私にとって終生忘れられないことがあります。それは売店で「あっ、今日は俺誕生日だ。」と云ったところ、側にいたM先輩が「おめでと」と云ってパンを買ってくれました。顔を知っている位の先輩にこの様にしてもらったこと、この風潮は「旧制山高」そのもので大変うれしく思い出します。また教授などの先生方は、旧制山高のご出身の方が多く授業は厳しかったものの、指導は良き先輩として接していただき、我々の終生の師となりました。研究室では、専攻の他に政治・経済、果ては酒・恋愛などに議

論を闘わせ、それが以後の人生に非常に役に立っています。

コンパは近くの惣野旅館で年に一、二回、居酒屋で飲むことも多く、思い出すのは深酒後「方便風し」の寒い夜の上野小路を深夜数人で練り歩き、龍福寺で鐘をつき、隣の女子寮にストームをかけたこともありましたが、山口の街は我々を温かく包んでくれました。

この様に「傍若無人」の学生生活を送りましたが、当時の学生は貧しかったが、将来何かしようという「眼差し」をもっていたように思います。先輩の皆さん、現在は学問や文化もハイレベルになっていますが、時には肩の力を抜いて我々が闊歩した一の坂川のあの「哲学の道（私称）」を歩いてみて下さい。

「追伸」

なおM先輩は去る一〇月二六日の「記念式典」にご出席され、お会いできました。

メッセージをお見せし「M先輩はあなたのことです。」とのことにはしばらくして、「よく覚えてくれて」と云われ大変喜んでいただきました。

祝賀会では同じテーブルになり、学生時代の思い出など至福の一刻を過ごすことができ、またの再会を約しました。そして後日丁寧なお礼状をいただき大変恐縮しております。まさに「同窓賛歌」で、これも鴻文会のご尽力の賜と厚くお礼申し上げます。

(文理第六回卒 西洋史学)



大学時代を振り返って

濱寄 勢津子

卒業して五年になります。文理学部の跡地は県立図書館になりました。結婚して山口市に居を定めてからはよく図書館に足を運びました。関守先生や関先生の講義を聴いたのはこのあたりだったかな、とお二人の音声や表情までもが蘇ることがあります。

暇があれば研究室に入り浸ったものですが、今も「山下文芸」は健在でしょうか。下宿で頭でっかちの観念的な小説を書いては載せてもらっていました。年月は随分流れたように思いますが、大学の四年間はいつになっても汚れない一途な輝きでもって、後々の人生を照らしてくれているように思います。

子供たちも巣立って夫婦二人暮らしになりました。時間が自由に使えるようになった今は、大学卒業と同時に入会した同人誌「文芸山口」に作品を寄せる日々となっています。当時とは内容も表現も異なる作品ですが、文字を一字一字原稿用紙に埋めていく習性は今も変わっていないと思います。

一〇冊目の著書「桐」を令和と改元した五月に出版しました。

(文理第一四回卒 国文学)



旅先のウズベキスタンにて

入学当初の平川新学舎は

寂しかった

佐々木 衛

昭和四二年四月の教養部学舎は建設現場の中にとぼつんと建っており、まるで西部開拓の急ごしらえの町を思わせました。「昭和四二年平川キャンパスで最初の入学式後教養部へ」の写真は、工事中のぬかるんだ道を新入生と父兄が一群となって黙々と歩く後ろ姿を写しています。この中に私もいたのです。この写真の左側には、砂埃の中に揚げられた「歓迎山口大学」の横断幕が写されています。見開きの最後に、「昭和四八年統合移転完了時のキャンパス写真」が掲載されています。この一連の写真には学生の姿はなく、授業中の風景も日常生活も垣間見ることができません。

一九七〇年(昭和四五年)は「学園闘争」の時代でした。ベトナム戦争はラオスとカンボジアを巻き込んで泥沼化し、アメリカ空軍は無差別爆撃を敢行していました。また、安保条約が延長される節目の年でした。「反戦」のスローガンは現実的な意味をもっていました。全国で広がった学生運動は各大学でそれぞれ異なる問題が契機となっていました。山口大学では西部開拓の舞台となるような学舎で過ごすことへの苛立ちが基層にあったのではないのでしょうか。

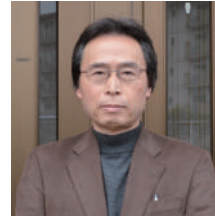
二年生の夏休みに、「資本論第一巻」を読みました。暑い日々の中、頁の中に汗が染みこんでいきました。わかりづらい用語を理解するために、読書ノートをつける習慣ができました。当時のノートを開くと、細かい丁寧な文字で記されているのに驚かされます。後の生活を方向付ける基礎的な作法を鍛錬したのだなと、今になって振り返ることが出来ます。

また、次の先生方を忘れることはできません。社会学研究室の故近沢敬一先生と故山本陽三先生です。何事も先走って傍若無人になりがちな私たちを、「疾風怒濤」期のとこだと、温

かく見守ってくださいました。私が今あるのは、この先生方の温情のおかげです。

(文理第一九回卒 社会学)

私の学生時代



南里 義則

後悔の塊がノドにつかえそうな、そんな切ない思いにいつもとらわれる。大学を卒業して四〇年以上経た今も「山口」の二文字を見る度に、あの街をさ迷う自分が見えてくる。

私たちが入学した一九七一年は七〇年安保闘争の残り火がくすぶっていた。入学式はなかった。授業を受けるつもりで教室に入っても、前年度の教養部生が怒声を上げて教官を責め立て、新入生は教室を出るしかなかった。学生大会ではマイクを手に「革命」をぶち上げる活動家らがヒーロー気分浸っていた。

平川の下宿の周りでカエルが鳴く学生生活に希望を見いだせず、私は三年時に休学して東京に出た。一年間新聞を配って首都の空気を吸い、山口に戻った。研究室では八木充先生に温かく迎えて頂いた。亀山公園近くに下宿した二年間、それなりに現代史を勉強はした。が、その頃に出会った女性とは私の至らなさを結ばれなかった。一の坂川の蛍の光の群れのまばゆさ、はかなさは今も忘れない。

(文理第二四回卒 国史学)



横溝洋一郎

山口大学在学中の一番の思い出といえば、下宿事情ですね。私は、昭和五十一年から五五年(一九七六年から八〇年)まで、文学部文学科に在籍していました。

当時は現在のようなおしゃれなアパートは数えるほどで、ほとんどの学生は、集合住宅、俗に言う「ウナギの寝床」で生活していました。通路を挟んで、四畳半の部屋が一〇数室並んでいました。そうそう、ハーモニカ長屋とも呼ばれていましたね。トイレ、風呂、流しは当然共同、洗濯機も奪い合いました。

一〜二回生の頃は、先輩の邪魔にならないよう気を遣っていましたね。それでも全く不自由さはなかった。三回生にもなると、後輩の下宿に集団で押しかけ、暑い夏は、昼間からビールで酒盛りをしていました。青春ですね。

当時は、一畳が一、七〇〇円でしたから、四畳半で七、六五〇円、なんとびっくりするぐらい、安い家賃ですね。いまでも、通勤で、山大通りを車で走りますが、街路樹が立派になったのを見て、時の流れをしみじみと感じています。

(文理第二八回卒 中国哲学)



研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会に対する助成要綱

(目的)

第一 この要綱は、鴻文会会員相互の親睦と交流の活発化を図るために開催される研究室同窓会・同期会・地域(ブロック)同窓会(以下「同窓会等」という。)に対する助成について必要な事項を定めることを目的とする。

(助成の対象)

第二 助成の対象は、鴻文会正会員の参加者が五人以上の同窓会等とする。

(助成の内容)

第三 助成は、正会員の参加者一人当たり千円とする。ただし、二万円を上限とする。

2 同一同窓会等に対する助成は、一年度一回限りとする。

3 同一同窓会等に対する助成は、毎年度は行わないものとする。

(助成の申請)

第四 助成を受けようとする同窓会等は、同窓会等の開催日の一週間前までに助成申請書(別紙様式1)に参加者名簿(別紙様式2)を添えて提出するものとする。

(助成の内定)

第五 同窓会等から助成申請書の提出があった場合、鴻文会会長(以下「会長」という。)はその内容を審査し、当該申請が適当であると認めるときは、助成を内定し、その旨を代表者に通知するものとする。

(報告書の提出)
第六 同窓会等は、同窓会等の開催日以後一週間以内に開催報告書(別紙様式3)を提出するものとする。

(助成の決定等)

第七 同窓会等から開催報告書の提出があった場合、会長はその内容を審査し、助成が適当であると認めるときは、助成を決定し、代表者の指定した口座に速やかに助成金を振り込むものとする。

(会報原稿の提出)

第八 助成を受けた同窓会等は、鴻文会の発行する同窓会報「鴻文」(以下「会報」という。)に同窓会等の開催報告を掲載するものとする。

2 会報原稿の形式は、次の各号に掲げるとおりとする。

(一) 本文の書式は、タテ一行二一字とし、分量は、全五五行以内とする。

(二) 本文とは別に、タイトル及び氏名を文頭に置き、卒業年次、卒業年及び専攻を()内で文末に表記する。

(三) 会報原稿には、当日のスナップ写真又は記念写真を添付する。

(四) 会報原稿の締切りは、九月末日とする。

(その他)

第九 この要綱に定めるもののほか、同窓会等に対する助成について必要な事項は、会長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成二四年五月一九日から施行し、同日以降に開催される同窓会等に対する助成から適用する。

第七回 山口大学 ホームカミングデー開催

令和元年一〇月二六日(土)、山口大学吉田キャンパスにおいて第七回ホームカミングデーが開催されました。

理学部卒業生で土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏による「山口から日本人のルーツと未来がみえる、未来を創る」と題した特別講演や「バレーボールフュスティブル」、理学部による「サイエンスワールド2019」、JAL折り紙紙ヒコーキ教室、もちまきなど、多くのイベントが開催されました。

人文学部では、OB・OG、退職教員と在職教員及び在学生が自由に交流できるよう、研究室開放が行われました。文学部創立七〇周年記念式典が同日開催されたため、式典前に人文学部棟を訪れ、整備された講義室、様変わりした研究室、久しぶりに眺める研究室からの山景色を楽しまれた同窓生の方もいらっしゃいました。

令和二年度は一〇月二四日(土)開催予定です。懐かしいキャンパスに是非お越し下さい。
(人文第三回卒・西洋史学 渡邊早苗)

鴻文会「賛助会員」の制度に ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとに行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行・送付、ホームページ管理などの活動を行い、最近では山口大学同窓会との連携や「同窓会等」の開催に対する助成を開始し、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中

にあつて、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございました。

活動を支えて下さった方々のお名前を記してお礼に代えさせていただきます。

なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。

平成三〇年度賛助会員(順不同 敬称略)

- 高崎淳子 村田和夫 多田幸子 近藤千鶴子
- 久米慶典 重村和子 内田光邦 細山田康弘
- 登城孝胤 森重祐二 大谷泰子 小篠美智子
- 藤本由紀 沖中武志 野村明夫 汐崎美恵子
- 岡光一浩 倉重雅子 横田由香 荒谷寿美郎
- 井上智美 山岡典子 和田修治 藤田加奈子
- 中尾哲雄 高橋幸輔 小野美典 添田建治郎
- 藤澤真弓 小川朝子 樋口尚樹 守田愉加理
- 芦田由実 小牧康博 兼村優子 椎野由紀子
- 梅田洋二 富田一彦 大森保典 田代枝理子
- 石川哲也 中垣八朗 住友立子 濱村浩
- 濱村祐子 大串明子 秋村寛之 村田博
- 門井好恵 水本孝二 白石重昭 磯部薫
- 奥田和子 清水康裕 吉武官三 林伸一
- 岡部晶子 住吉隆義 渡邊早苗 村上明
- 平田昌司 西村晴二 岡野優子 島越郎
- 鈴木量子 井上範子 柳浦俊静 菊谷進
- 渡辺信生 小山良昌 三木允彦 栗原宏
- 池佳代 吳 娜

鴻文会事務所の事務を勤めて下さいます小野さんが、平成三一年三月末をもってご勇退されました。長い間、ありがとうございました。

平成三一年四月からは、宮澤さんが勤務されていますことをお知らせします。

編集後記

同級生のK君やOさんからメールや電話があることがあります。

気持ちには昔に戻り、心とむひとときです。

私も卒業してから四〇年が経ちましたが、当時の先輩・同輩・後輩の皆さんが元気で活躍されていることを願っています。また、お会いしたいものです。
(森重祐二)

昨年暮れに内田会長に頂戴した花梨の実。新年を迎えても、そのほかに甘く優しい香りを楽しんでいたところ、突然の訃報。今でも優しい香りに寂しさが混じって心に染みてきます。
(渡邊早苗)

会報の編集に関わらせて頂いて三年目。お陰様で、これまで近くにありながら縁遠い存在だった母校が、身近に感じられるようになりました。
(山本明史)

日頃より鴻文会や職場の研究室の方々が名簿等の個人情報について誠実に取扱っておられる姿を拝見しています。情報の信頼性は情報に関わる人の信頼性を反映しており、それが組織への信頼にも繋がっているんだなと実感しています。
(和崎睦子)

今たびオカが大流行である。外国人が日本の主食はタピオカになったのかというとか。その元のキャッサバの茎をこの春植えた。五株から一〇キロの芋を収穫。甘味はないがほくほく感がとてもよい。来年用に太い茎を取っている。
(大谷泰子)

月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の宮澤さんが勤務しています。付近にお越しの際は、是非鴻文会事務所(沖田ビル二階)にお立ち寄り下さい。
会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。
(一同)

原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によつても会誌の編集を進めます。

ご自身の学窓時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。

投稿要領は次のとおりです。

- (一) 本文の書式はタテ一行二一字とし、分量は全七二行以内とする。
- (二) これとは別に、
 - ①タイトル、
 - ②氏名、
 - ③自身の顔写真一枚を文頭に置き、
 - ④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず()内で表記すること。
 ただし①④項合わせて一〇行以内とする。
- (三) 顔写真以外にスナップ写真を掲載したい場合は、一枚限りとして、一枚につき本文の行数を一七行ほど削減すること。
- (四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。
- (五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。
- (六) 以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照のこと。
- (七) 原稿は返却しません。写真は返却します。
- (八) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。
- (九) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。
- (一〇) 締切りは、毎号とも九月末日とします。